

Faulkner の Light in August

植 村 郁 夫

(文理学部英文研究室)

Faulkner は I think there's a period in a writer's life when he is, well, simply for lack of any other word, fertile and he just produces... I think there's one time in his life when he writes at the top of his talent plus his speed, too, (*Faulkner at Nagano*, p. 109) と言っているが、この小説は彼の創作力が豊かに活動した時期の一群の佳作、*The Sound and the Fury* (1929), *As I Lay Dying* (1930), *Sanctuary* (1931), *Light in August* (1932) の最後に位置するものである、

これらの作品において彼は文学の新しい技法を用いて天才的な成果を生み出しているが、初めの二つは Compson 家と Bundren 家の物語で、登場人物も舞台も作者の経験と観察の範囲で書かれている。これに比べると後の二つは経験というよりは作者の想像力によって書かれているので、登場人物も大きなテーマを代弁するために非常に抽象化されている。彼はこう言っている。 A writer needs three things, experience, observation, and imagination, any two of which, at times any one of which, can supply the lack of others. With me, a story usually begins with a single idea or memory or mental picture (*Writers at Work*, p. 133)

The Sound and the Fury について彼は It's a tragedy of two lost women: Caddy and her daughter. と言い、梨の木の上から祖母の葬式を見ている少女の泥のついたパンツの想像図から発展して、その image が the fatherless and motherless girl climbing down the rainpipe to escape from the only home she had, where she had never been offered love or affection or understanding に置きかえられた、と言っている。*Sanctuary* においては Popeye も Miss Temple もアメリカの北部と南部の文化、社会悪、を代弁する抽象化された人物である、だからその行動は読者の経験をこえて恐ろしい。

Light in August も同じ着想の作品であるがテーマがもっと広く大きく根をはった深刻な歴史的なものであり、作者の社会的関心も強く描き出されている。登場人物はもちろん私たち読者の経験をこえた世界で行動する抽象性を持っているが、この作品では作者のテーマとの取組みが前作より落ち着いており、表現の文章も美しく引締っている。第一章の Lena Grove が兄の家を出て Jefferson へ行くまでの旅の描写は詩的な美しさに満ちている。

1

南部の八月の道ばたに坐って、荷馬車が自分の方に向って丘を上ってくるのを見て、Lena は I have come from Alabama: a fur piece. All the way from Alabama a-walking. A fur piece. と考える。アメリカ民謡を思い出させる文句だが、彼女は banjo でなく赤ん坊をお腹の中にかかえて、true love ではなく untrue love を探しに行っている。(民謡調が感じられると同じく *Light in August* の題名も、ギラギラする「八月の太陽の光」のほかに、民間でいわれる「八月には牛のお産が軽い」という意味があり、ひいては Lena のお産が軽いという意味にもなる。)

彼女は12才の時に相次いで両親を失い、兄の家に引取られる。そこで大勢の子供の世話をしながら過すうち、20才の時に男(風來坊の Lucas Birch)を知り子供ができるようになる。兄に叱られ、男を探しに家を出る。She carried a palm leaf fan and a small bundle tied neatly in a bandana handkerchief. It contained among other things 35 cents in nickels and dimes.

Her shoes were a pair of his own which her brother had given to her. They were but slightly worn, since in the summer neither of them wore shoes at all. When she felt the dust of the road beneath her feet she removed the shoes and carried them in her hand. (p. 6) というほど彼女は貧しい白人の娘である。(彼女は教育のない女である。教育のある女は *Sanctuary* の Miss Temple, *The Wild Palms* の Charlotte Rittenmeyer に描かれているが、前者は Popeye に rape され、後者は良人と子供をすてて若い医学生と恋におち abortion の手術で死ぬ。) 青いドレスを着た彼女は静かな落ち着いた顔をして、暑い静かな八月の午後、絶えず眠っているような状態でゆっくり進む驛馬車に乗っていくが、その旅は昼から夜へ夜から昼への長い平和な変化の連続で、まるで壺の周りを廻っているように永久に進むことのない動きのようである。The driver does not look at her. His voice is quite casual. "How did your folks come to let you start out, in your shape?"

"My folks are dead. I live with my brother. I just decided to come on."

"I see. He sent you word to come to Jefferson."

She does not answer. He can see beneath the sunbonnet her calm profile. The wagon goes on, slow, timeless. The red and unhurried miles unroll beneath the steady feet of the mules, beneath the creaking and clanking wheels. The sun stands now high overhead; the shadow of the sunbonnet now falls across her lap. She looks up at the sun. "I reckon it's time to eat," she says. He watches from the corner of his eye as she opens the cheese and crackers and the sardines and offers them.

"I wouldn't care for none," he says.

"I'd take it kind for you to share."

"I wouldn't care to. You go ahead and eat."

She begins to eat. She eats slowly, steadily, sucking the rich sardine oil from her fingers with slow and complete relish. (p. 25) 彼女が Jefferson に着いたとき家が焼けている煙が見える。(これは Joe が Miss Burden を殺してその家に火をつけたためである。)

彼女は Lucas Birch が働いていると聞いた製材所へ訪ねて行くが、会った男は Byron Bunch で人違いである。しかし前にそこで働いていた Joe Christmas と Brown の話を聞いて、この Brown が Lucas であることを女の直観で知る。この二人の男は酒の密売で金をもうけるので工場をやめている。日曜も休まず仕事をやる誠実な男 Byron Bunch はこの Lena を愛するようになる。Byron の親しくしている不運の牧師 Hightower は Byron が彼女に近づくことを注意するが、彼女のお産の手伝をしてやる。

Byron は工場をやめて、赤ん坊を抱いた彼女と旅に出る。小説は Lena の旅に始まり Lena の旅に終わっているが、この間に静かな彼女と対比される激しい Joe Christmas の劇的な物語が展開する。(Lena が到着する前の真夜中に Joe は殺人を犯し、追跡が行われ、Hightower は隠とん生活から呼び出され、老 Hines は孫の懲罰を見るために Jefferson へ行き、Byron は Lena と旅に出るため製材所をやめ、Lena の赤ん坊は生れ、Grimm のリンチが行われる、という劇の大団団のように人物が集められる。)

2

Joe と Lena は plot 発展上の関係はないが、同じ不幸な環境にあって、一方が静かな耐え忍ぶ力であるに比べ他は激しい反抗の力として対比されている。

Joe は母たる女 (Milly Hines) の過ち (メキシコ人で黒人とおぼしきサーカスの男と関係する) によってネグロの血が入っていると推定され、祖父 (Hines) に孤児院へ入れられ (祖父はその

門番になってなお彼を監視している), 厳格な家庭に引取られ養父 McEachern に教義問答をおぼえることを鞭でしられ, 給仕女 Bobbie によって女を知り, dance party へ彼を探しにきて女を売女と罵った養父を殴り倒し金を奪って逃走し, 製材所でオガクズ運びをし闇酒を売り, 黒人保護者 Miss Burden の家へ忍びこみ食事を与えられ, 彼女と関係し, その小屋に住み, 教育を受けて弁護士になれとすすめる彼女を殺し, その家に放火し, 追われ捕えられ, 手錠のまま逃亡し, 追跡され, ついに警官でないリンチ代表 (Percy Grimm) に射たれ, 「地獄へ行っても白人の女に手出しの出来ぬようにしてやる」(Now you'll let white women alone, even in hell. p. 409) と肉切庖丁で去勢される。

Joe が最後をとげた場所は同じく不幸な老牧師 Hightower の家である。彼も Joe と plot 上の関係はない。Lena ともお産をさせたこと以外に plot の関係はない。しかし彼もこの小説で一つの物語を構成する主要人物である。彼は牧師を志して神学校を卒業し, 恋により美しい妻を得, 妻と共に Jefferson の教会にくるのだが, 彼の説教は教区民に満足を与えない。説教壇に立つと彼は興奮して南北戦争のこと, その戦で戦死した騎兵の祖父のこと, Grant 将軍の軍需品倉庫が燃える光景, などについて話し, 駈ける馬 (galloping horses) の幻想につかれた彼の説教は要領を得ない。家庭生活において彼は妻を満足させることができない。妻は泣いている日が多く, ついに気が狂って入院し, やがて Memphis のホテルの窓から飛降自殺する。ホテルの部屋には酔っぱらった男がいた。二人は偽名で夫婦として泊っていた。事件が新聞に大きく出たので, 教区民は彼を去らせようとして教会へ出席せず, 召使も備えないようにする。彼は自炊して去ろうとしない。家の硝子をこわし, 脅迫文をつきつけても, 森の中で木に縛りつけ意識不明になるまで殴っても, 彼は去らない。やがて人々も彼を放置しようということになる。内職のため写真現像の看板がかけてあっても仕事はなく, 人から食事をもらったりしている, 名前の前の D. D. (Doctor of Divinity) を人々に Done Damned と笑いものにされつつ孤独のまま老いていく人物である。友としては Byron Bunch しかないが, 彼も Lena への愛に目ざめ無活動な老教師の世界を去っていく。

3

Lena と Joe と Hightower は plot 上の関係は少いが, これらの人物が対比される時, テーマ統一上に効果が生じる。対比について作者は *The Wild Palms* と *Old Man* の場合のように antithesis とか, 音楽の counterpoint を考えている。

Lena Grove は不幸にあっても, その名 grove (森) のように calm, serene で, 自然と調和し, 人々の厚意を受けつつ真夏の南部を旅している。そして彼女は自分の意志にしたがって旅に出たので, 力強い忍耐の歩みを続けて悔いるところがない。(Anderson の *Winesburg, Ohio* にも同じように男の呼寄せを待っている Alice という女が描かれているが, Lena のような積極性がない。) 作者はここで Emily, Caddy, Quentin のような哀れな女の image を忘れて, 耐え忍ぶ力をもった母となりうる女の像の描いている。Lena は白人であるが, 白黒の別なく, むしろ作者の愛する Dilsey に似た生活力のある女である。男に対する愛, 母となる責任, 女の忍耐力, を表わす抽象的女性像であって, 古くからある Mother God, Earth Goddess を思わせる。彼女の旅も slow, timeless で something moving forever and without progress across an urn で, 円 of image で表わされた大地の女神の巡回のようである。作者もこう言っている。I would say that Lena Grove in *Light in August* coped pretty well with her fate. It didn't really matter to her in her destiny whether her man was Lucas Birch or not. It was her destiny to have a husband and children and she knew it, and so she went out and attended to it without asking help from anyone. She was the captain of her soul. One of the calmest, sanest speeches I ever heard was when she said to Byron Bunch at the very instant of

repulsing his final desperate and despairing attempt at rape, "Ain't you ashamed? You might have woke the baby." She was never for one moment confused, alarmed. She did not even know that she didn't need pity. Her last speech for example: "Here I ain't been traveling but a month, and I'm already in Tennessee. My, my, a body does get around." (*Writers at Work*, p. 139)

これと対比される Joe Christmas の33年の生涯は、不運の星の下に生れ、それに順応することなく、その不幸をもたらした社会に対する激しい反抗である。彼にはキリストを連想させる点が多くつもあるが、これはキリスト受難の現代図ではなく、むしろ文化の混乱した現代においてキリスト教に安住して自己満足している人々への警告であろう。というのはこの小説は Joe を中心に現代社会の悪のからくりと脅威を描いているからである。

彼の不幸を決定づけたのは黒人の血を受けていることである。(ここではまだ黒人は、*Intruder in the Dust* の Lucas Beauchamp のように社会正義によって救われず、キリスト的犠牲行動も *A Fable* を待たねばならない。) これはアメリカに今なお大きな問題として残っている人種問題である。黒人の血が入っているために祖父は彼を見捨て、憎み、リンチを主張する。孤児院でも女栄養師に情事目撃の口止め料に買収され人間なみに扱われず、養父には鞭で教育され、年頃になって女と遊ぶことを禁じられ、Miss Burden との関係でも、黒人であるために特別の好意を受け、好まざる教育を押しつけられる。これら孤児院、養父、人種平等実現を目ざす活動が彼に働きかけるが、一方にまた彼を排撃する Calvinism と根づよいリンチの力がある。この文化混乱の中でアメリカの理想主義(孤児院、奴隷開放、人種平等)も彼を救い得ない。人間として認められようとしても認められず、保護されるとしても目的意識による目的達成の実験としてならば、真の愛は通わず、いきおい彼は救われることのない反逆児とならざるを得ない。その結果は彼を滅そうとする力によって滅される。

彼の行う悪徳と暴力は多い。養父を殴り倒して金を奪って逃亡し、Miss Burden の家に侵入し彼女を犯し、その家に住んで酒の密売をし、彼女を殺し家に放火する。追われて逃げこんだ家で老牧師を殴り倒す。Miss Burden はその名 burden (重荷) でわかるように、黒人を解放し教育し社会的地位を得させなければならないという三代にわたる使命をもって黒人のために身を捧げている女である。(彼女は黒人を愛しなければならないという気持から彼に sex を許したとも考えられる。)

この Joe と彼を取巻く人々、アメリカの社会との衝突は、現実にあったと思うにはあまりに恐ろしいが、アメリカ文化の欠点か、こうした人間の行動を起させるということは考えられることである。Dreiser も *An American Tragedy* で社会の力が人間の悲劇を作りだしたことを書いたが、その主人公 Clyde に比べると Joe の方にはるかに未来のない救いのない、どうしようもない暗い宿命が感じられる。不満足な、不幸な、愛のない偽善の世界で、彼はただ反抗し一直線に逃げ出した衝動にかられるのみである。直線の image で表わされる無目的な反抗の直線行動にすぎない。

4

この未来のない世界について Sartre はこう言っている。As for Faulkner's concept of the present, it is not a circumscribed or sharply defined point between past and future. His present is irrational in its essence; it is an event, monstrous and incomprehensible, which comes upon us like a thief—comes upon us and disappears. Beyond this present, there is nothing, since the future does not exist. One present, emerging from the unknown, drives out another present. It is like a sum that we compute again and again: "And...and...and then." (*Faulkner: Two Decades of Criticism*, p. 181) Joe にも

流動好転する未来はなく、既に運命の筋書ができていてその展開を待っているような未来である。Dreiser の定命論が感じられ、悲運の宿命を与えられた男が社会悪に対してどのように無益な反抗をしたかを描いたもので、これも一つのアメリカの悲劇である。ただ Joe の場合は Clyde より歴史的、文化的圧力が大きく、一青年の悲劇というより、黒人の血を受けた多くの人間を代表する悲劇である。この意味で抽象化されていながら人間の宿命を強く感じさせるものがある。

悪徳と暴力を描いたことについて作者はこう言っている。 I think the reason is simply that I love my country enough to want to cure its faults and the only way that I can cure its faults within my capacity, within my vocation, is to shame it, to criticize, to try to show the difference between its evils, its good, its moments of baseness, and its moments of honesty, integrity and pride, to remind the people who condone the baseness that there were moments when it was glorious, when they as a people, their fathers, grandfathers, did fine, splendid, glorious things. Just to write about the good qualities in my country wouldn't do anything to change the bad things. I've got to tell people about the bad ones, so that they'd be angry enough, or shamed enough to change it. (*Faulkner at Nagano*, p. 126) そして自分は sociologist ではないが、そうした関心で小説を書いた、自分はむしろ humanist と呼んでもらいたいと言って、さらにこう言っている。 There are things in my country that I don't like, that have become more apparent so that one has got to hate it a little more than one did twenty years ago because it's worse now than it was then. (*Ibid*, p. 127)

この小説の大きなテーマになっている黒人の問題について作者はこう言っている。 It's economic. The white man in my country is afraid that if he gives the Negro any advancement, any social advancement at all, the Negro man will stop working for the low wage and then he will get less when he sells his cotton, that's all it is. But they will use religion, they will use all sorts of nonsense about the white man having been created by God better than the black man to justify this position. It's not that at all. It's purely and simply they want the black man to keep on working for less money than they'd have to pay a white man to do that work. That's all. (*Ibid*, p. 129) 作者のこの考え方はこの小説に一番よく表われていると思うが、この考え方もってすれば、Joe は全く救われない人間であるのは当然である。「神は白人である」と広言する祖父 Hines も、教義問答をつめこもうとする養父 McEachern も、白人の地位を認めさせるために宗教を使うやからであり、Miss Burden は all sorts of nonsense を使う者にすぎない。(彼女は結婚もせず社会事業に専念するアメリカ女性の一つの型で、*The Bostonians* の Olive のような女である。)

さらに宗教についての作者の考えは、点の image によって表わされる老牧師 Hightower の無能力、無活動の中に表わされている。彼はいたずらに光榮ある過去の幻想につかれて、孤立した自分の世界(皮肉にも「高い塔」という名をもっている)から出られず、家庭的にも社会的にも失敗者である。彼の宗教は自分だけの生きる力とはなっても、妻や民衆にとっては無力無縁のものである。クリスマス・カード製作と写真現像の看板につけた学位 D. D. は Done Damned と笑われる存在である。しかも彼の孤高は、黒人に対する白人の優位を維持する手段に使われる宗教には断乎反対するというはっきりした態度でもない。彼の行動といえば、暴力に屈せず町に残ったこと、Lena のお産を助けたこと、Joe のリンチを救うために偽の証言をしたことである。Byron に忠告もしたが、Byron は彼の忠告に従わず、彼の無活動な世界(この二人の間には精神的類似がある)から自分を引きはなし、Lena への愛に自分を発見し、彼女の愛の中に休息を見出し、赤ん坊を抱いた Lena と一緒に旅に出て、点から円に発展する。荷馬車の上でいう Lena の次の言葉でこの

小説は終わっている。My, my. A body does get around. Here we ain't been coming from Alabama but two months, and now it's already Tennessee. (p. 444)

5

Narrative plot よりも thematic unity を考えて対比されていると思われる三人の人物は特異な人間像であるが、中でも Joe には大きな問題がからまっていて読者に強く迫るものがある。彼は歴史的な社会悪でどうしようもない宿命の中で行動し、未来の希望のない人間で、読者は彼の行動を見ているうちに苦しくなってくる。An American Tragedy の主人公にはまだ成功の夢があり、The Great Gatsby の主人公には成功の夢が実現するかに見える幻想があるが、Joe には全然夢がない。作者が Joe をおいた世界には夢の余地がない。同じく暗い Heart of Darkness でも、希望の持てない世界でなく、希望を捨てた世界である。この小説ではアメリカの歴史的な文化、宗教、社会習慣の悪い面が一つの壁となって Joe に迫り、彼を押しつぶすかのようなものである。Joe はこの壁が迫ってくる狭い空間で反抗する、すなわち、人間として認められたいために、体力を暴力に使い、知力を悪知恵に使い、性慾を許されざる形で満ちし、好まざることを強いる力に反抗しては殺人を犯す。ついにアメリカ南部社会の悪習慣であるリンチ (Caldwell の *Knell to the Rising Sun* に好例がある) を受け、射殺去勢される。

彼に働きかける外部の諸力も悪ければ、それに反抗する彼の力も悪い。どちらも悪いものばかりである。これこそ作者の、社会の矛盾と混乱、そしてその中に生きていかねばならない人間の運命に対する考えを示すものである。長野のアメリカ文学会で、彼は、“Do you consider human life basically a tragedy?” という質問に答えて、“Actually, yes.” と答えているが、この小説においても、彼の vision は、Lena を登場させることによって和らげられてはいるものの、ひどく tragic である。舞台は南部であっても、描かれているのは一般人間の運命である。人間は悪に取り囲まれると、自身の内部にもっている性質によって悪の犠牲ともなり、また悪の手先ともなる。悪は人間が支配することのできない過去からやってくるもので、人間はその悪と戦うことはできるが、それを否定したり、自分の力で取り除いたりすることはできない。このような作者の tragic vision によって Joe Christmas という人物は描き出されているようである。

Joe に真の愛情と好意を寄せるものは何も描かれていない。孤児院、宗教的善導教育、黒人保護、これらは目的のために動いているおきまり仕事で、Joe にとってはあだなお節介として描かれている。作者の意図はアメリカ南部だけでなく、アメリカ全体の、そして広く現代社会の悪の指摘である。

これら人生の悪の諸相が Joe Christmas を中心とする劇的な行動の形で捕えられ表現されているので、この小説の文章は *Sanctuary*, *The Sound and the Fury*, *The Wild Palms*, *Intruder in the Dust* に見られるような意識の流れや夢と現実の境を描く長い一頁以上にわたって終止符のないようなものでなく、短くて読みやすい。老牧師 Hightower の心境を写す文章でも長くないのである。同じことを繰返して書く作者のくせはそのままであるが、読み易い文章で、人生の大きな問題を、芸術的な文学に作り上げた点は偉大である。Trilling の次の言葉が思い出される。We feel that Hemingway and Faulkner are intensely at work upon the recalcitrant stuff of life; when they are at their best they give us the sense that the amount and intensity of their activity are in a satisfying proportion to the recalcitrance of the material. And our pleasure in their activity is made the more secure because we have the distinct impression that the two novelists are not under any illusion that they have conquered the material upon which they direct their activity. (*Contemporary American Literature*)

この小説は手法の独創的な点とともに、この Trilling の言った意味において偉大な小説である。

参 考 書

- Light in August* (Modern Library), Introduction by Richard Rovere
Richard Chase: *The American Novel and its Tradition*
William Faulkner, *Two Decades of Criticism*, ed. by Hoffman and Vickery
Joseph W. Beach: *American Fiction 1920—1940*
Faulkner at Nagano
Writers at Work, ed. by Malcolm Cowley
W. M. Frohock: *The Novel of Violence in America*
William O'Connor: *The Tangled Fire of William Faulkner*
Lionel Trilling: *Liberal Imagination*

(昭和36年9月11日受理)

